

スペイン語の *aunque* 節の叙法選択に関する仮説の検証*

三 好 準 之 助

要 旨

筆者の *aunque* 節の叙法選択に関する仮説は、①譲歩節の内容が現在・未来の推測の内容なら、未知型の接続法現在の動詞が使用される；②譲歩節の内容が現在の事実であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思うときには、意外型の接続法現在の動詞が使用される；③譲歩節の内容が現在の事実であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思わなければ、無標の叙法である直説法現在の動詞が使用される、である。今回、2種類の譲歩表現（通常の譲歩文と疑似譲歩文）に注目して自身の仮説をアンケートなどで検証した。その結果を加えれば、筆者の仮説は以下ようになる。①と②の場合、通常の譲歩文を表現している。そして③の場合、疑似譲歩文を表現していることになる。

キーワード：叙法選択、接続法、語用論的意味、(肯定的) 否定的追加、(疑似) 譲歩文。

筆者は三好（2018）にて、スペイン語の譲歩表現のひとつである *aunque* 節における叙法選択について、これまでに発表している仮説と先行研究での仮説を対比し、両者のかかわり方を示した。今回、筆者は自身の仮説を検証すべく実際の用例を調べ、さらにアンケートを実施した。本稿はその結果を報告するものである。

なお、本稿はスペインの現代スペイン語を考察対象とする。

1. 筆者の仮説

まず、スペイン語の叙法と *aunque* 節における叙法の選択について筆者が考えてきたことを、三好（2018, 2019）の記述に基づいて改めて略述する。

1.1. 叙法に関する筆者の基本的な仮説

スペイン語には2種類の叙法がある。直説法 (*modo indicativo*) と接続法 (*modo subjuntivo*) である。筆者の仮説では、直説法は無標の叙法であり、接続法は有標の叙法である。接続法は基本的に、従属節で使われる動詞の活用形であり、そのときの従属節の命題内容は話者にとって否定的である。すなわち、話者にとって、その命題内容が自身の知識のなかに存在しない（情報として持っていない）事柄であるときに使われる。そのときの従属節の命題は、話し手が判断を下すための、仮に想定された事態であることになる。話者の主観的な認識モダリティを表

現している¹⁾。

1.2. 接続法とは

接続法で表現される否定的な心的態度は2種類の発話状況によって表現される。すなわち、命題内容がまだ起こっていないので確認できないという意味での未知型と、起こっていても話者自身が確信している情報ではないという意味での意外型である。

未知型の接続法とは、たとえば *Dudo que venga Juan*. 「私はホアンが来ることを疑う」の従属節の命題 *Juan venir* 「ホアンが来ること」という情報が、話者にとってまだ確認していない事柄であるとき、その未確認という否定的な心的状態を表現する叙法であり、意外型の接続法とは、たとえば *Me alegro mucho de que venga Juan*. 「私はホアンが来てくれてとてもうれしい」の従属節の命題 *Juan venir* 「ホアンが来る(来た)こと」という、発話の文脈から得た情報が、話者の持っている確かな情報ではないときに使われる接続法である。

意外型の接続法は、いいかえれば、話者は従属節の命題で表現される出来事存在自体は認識していても、話者自身は「ホアンは来ることはない」と思っていたとき、その命題内容は自身の確信している情報ではない(否定的)ことになる。従属節の出来事が話者の持っている情報と矛盾しているのである。その意外性が従属節の接続法で表現されることになる。ここで、意外性という概念を明確にしておきたい。意外性とは、思っていたことと実態が食い違う状態のことである。たとえば、発話 P を耳にして *¡No me digas!* 「(意外性を表わして)まさか!」と応答する人のことを考えてみよう。P で伝達される情報が、その応答時には自分の認識 (no P) を否定するときである。P は話者の認識と矛盾する。他方、意外性に類似する心的態度がある。P の事柄について話者はなにも考えていなかった場合である。意外の事態である。前者の意外性の場合、話者は自身の認識と矛盾するという意識を、従属節で表現される P の事柄に意外型の接続法を使うことで表現することになる²⁾。そして後者の場合、話者は P を新たな情報として自身の認識に加えることになる。

意外型の接続法が表現するこの心的状態は、社会心理学で使われる「認知的不協和」の一種である。すなわち、「2つの認知要素(自己または環境に関する知識・意見・信念・感情)が互いに矛盾すること」を表現している³⁾。話者の認識の中で起こる、自身の知識(確かな情報として蓄積している情報)と新たに把握した情報との間の矛盾のことである。

意外型の接続法については、さらに、表現される従属節の事柄が、つねに聞き手(読み手)にとっても既に知っている情報(旧情報)であるわけではないことを指摘しておきたい⁴⁾。たとえば、*Me alegro mucho de que ya estés mejorado*. 「私は君がもう良くなっていることがとてもうれしい」という発話では、当然、聞き手も従属節の事柄を確かな情報として持っている。しかし、ホアンが病気であると思っていたが良くなったと聞いたばかりの話者が、おなじくホアンの友人だがまだホアンが病気であると思っている人に向かって *¿Y tú sabes una cosa? Me*

alegro mucho de que Juan ya esté mejorado. 「ねえ、教えてやろうか。私はホアンがもう良くなっていることがとてもうれしいんだよ」と言ったような場合、聞き手にとって従属節の事柄は新たな情報になるからである。なお、この指摘は後述 (3.3.) のアンケートでも確認できる。

他方、接続法には過去時制と非過去時制がある。本稿ではその検討対象を非過去時制の接続法に限定して論述する。

1.3. aunque 節の叙法選択に関する仮説

筆者は aunque 節の叙法選択の仕組みに関する仮説を、三好 (2018: § 3.1.3.) で以下のように説明しておいた。

①譲歩節の内容が現在・未来の推測の内容なら、その内容は仮定されているので、未知型の接続法現在の動詞が使用される。

②譲歩節の内容が現在の実事であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思うときには、意外型の接続法現在の動詞が使用される。

③譲歩節の内容が現在の実事であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思わなければ、無標の叙法である直説法現在の動詞が使用される。

②の譲歩文とは、帰結節の事態の成立を可能にする条件のなかに、普通には可能にすると考えられない条件を容認する表現である。そしてその容認は、期待とその否定（考えられない条件が否定されて、考えられる条件となる）という関係になる。その否定は話者にとって自身の認識と矛盾している。話者はその矛盾を表現したいとき、*aunque* 節で意外型の接続法を使う。

この *aunque* 節の叙法選択に関する仮説を、あらためて別の視点から説明しておこう。①で未知型の接続法が表現している事態は、こんな現実があるのではないかと思いつく仮想の事態である。②と③では、譲歩節の内容は、現在の実事であって、そのような事態（条件）のもとでも主節の事態が成立する。②では、話者の認識では、そのような条件（譲歩節の内容）のもとでは主節の事態が成立しないことになっている。このように、話者が、主節の事態の成立条件ではないと認識していた条件（副詞節の事態）が成立条件として容認されるとき、その副詞節の事態は、主節の事態が成立する条件として話者自身が持っている条件と矛盾している。譲歩節の事態が意外な条件であることで、その動詞に意外型の接続法が使われる。そして③では、話者は、副詞節の事態（前提）を、そのような結論（主節の事態）の成立条件として考えていなかったときである。そのような前提は話者の認識と矛盾しない。すなわち、主節の事態が成立する条件が単にひとつ追加されたということであるとき、譲歩節の動詞は無標の叙法である直説法になるのである。

次節で、この「矛盾する・しない」という意味を明確にしておこう。

2. 譲歩表現の *aun* と *aunque*

現代スペイン語には *aun* という綴りの2種類の副詞がある。ひとつはアクセント記号の付いた「時の副詞」*aún* 「まだ」で、もうひとつはアクセント記号の付かない「強調の副詞」*aun* 「～さえ」である。*aún* はラテン語の副詞 *adhuc* 「ここまで、いまなお、おまけに」に、*-n* で終わる数種類の小辞 (*bien* 「よく」、*sin* 「～なしに」、*según* 「～によると」など) の影響で語末に *-n* を加えて12世紀中ごろから使われている⁵⁾。*aun* はこの *aún* から派生したが、さらに接続詞 *que* と組み合わせさせて譲歩の接続詞 *aunque* が生まれた⁶⁾。

2.1. *aun* の意味

強調の副詞 *aun* は、動詞で表現される行為がほとんど期待できそうにない先端のケース (*un caso extremo*) を表示する語群の前で使われるが、それは例えば

1. *Aun los más torpes lo acertaron.* 「(他の者たちは言い当てたが、言い当てると期待されていない) 愚鈍な者たちもそれを言い当てた」⁷⁾

のような表現においてである⁸⁾。

上記の「先端のケース」という指摘からも推測できるように、*aun* は「尺度の」(*escalar*) と呼ばれる「焦点表示の副詞」のひとつである。それが表示する焦点は、人や物や特質や状況の一定の総体の存在を前提にするだけでなく、さらに、それらの概念で暗に形成される尺度 (*escala*) とか階層のなかの先端のひとつ (*uno de los extremos*) に位置づけられており、尺度のその他の要素は表示されていることもいないこともある⁹⁾。

2.2. *aun* が表示する「先端」の語用論的意味

強調の副詞 *aun* によって、人や物の総体を表わす尺度の先端となる目盛りが新たな焦点として追加される。その追加の様相を Battaner Arias (2002: 187) を引用して具体的に説明すると以下ようになる。

「表現されている状況において、なにかが生じることを指すが、その生起は驚きであるか、または、そうはならないと思われていたことである «Indica que algo se produce también en la situación que se expresa, aunque ello sorprenda o se espere que no fuera así».

2. *Aun cansado, lo hacía mejor que tú.* 「彼は疲れていたが、それを君より上手に行なった」
3. *Aun con las manos atadas a la espalda, es capaz de abrir una caja fuerte.* 「彼は背後

で両手を縛られていても、金庫を開けることができる」

例文2では、彼が疲労にもかかわらず行なった行為が驚きの対象になる。話者は、彼が普段(状況の総体)ならそのような行為を問題なく行なうと思っているが、疲れていても行なったということが驚きの対象になる(彼のそのような行為は、話者にとって意外のことである)。例文3では、話者は、背後で両手を縛られている人は金庫を開けられないと思っているが、その想定に反して、彼は金庫を開けられる、と述べている。ただし、単なる驚きと解釈するか想定に反していると解釈するかは、あくまでも話者の判断である。

本稿では、例文2のような単なる意外の驚きの状況に焦点が当てられる *aun* の表現を「肯定的追加」と呼び、例文3のような話者の想定と矛盾する状況に焦点が当てられる *aun* の表現を「否定的追加」と呼ぶことにする¹⁰⁾。

2.3. *aunque* が表示する「先端」の語用論的意味

第2節の冒頭で、譲歩の接続詞 *aunque* は強調の副詞 *aun* と接続詞 *que* が組み合わさったものであること指摘した。あらためて、*aunque* が表現する語用論的意味について考えてみよう。

2.3.1. *aunque* の尺度的表現

上記(2.1.)のように、強調の副詞 *aun* は焦点表示の尺度的表現を行なう。言い換えれば、*aun* は尺度的な性格の追加的焦点表示の副詞であり、暗に尺度の存在を示唆して、修飾する相手である分節要素を尺度の先端のひとつに位置づける(否定文なら、述語で表現される状況では実現が不可能になるような限界点を指し、肯定文ならその尺度の反対側の先端を指す)¹¹⁾。

aunque が表現する譲歩という概念は、文法的なものではなく、レトリックの文彩のひとつである¹²⁾。譲歩とは尺度的関係の独特の種類であり、問題にされる状況は必ずしも極端なものではないものの、論証的には尺度の関係にあるものと評価される。接続詞の *aunque* は *aun* と *que* というふたつの構成要素に分割できるが、前者は尺度的副詞(正確には包括的副詞)の *aun* に他ならず、後者は従属表示の接続詞 *que* である¹³⁾。

aun は単なる驚きの状況に焦点が当てられる「肯定的追加」と話者の想定に反する状況に焦点が当てられる「否定的追加」という2種類の語用論的な意味を表現する(2.2.)。そして *aunque* の *aun* はそのような語用論的意味を表現する *aun* であるからには、*aunque* もこのような2種類の焦点を追加する語用論的機能を持っていることになる¹⁴⁾。

2.3.2. 譲歩表現の解釈と尺度的表現

aunque の譲歩表現はどのように解釈されているのであろうか。いくつかの解釈例を、三好(2018: §2)を参考にして紹介しよう。

2.3.2.1. NGLE (2009) の場合

NGLE (『スペイン語新文法』) によると、譲歩とは、伝統的に、ひとつの命題とひとつの反命題でできている語連結の表現のことである。譲歩構文は、譲歩節と帰結節が逆の結論を指している。たとえば、

4. Aunque estaba muy cansada por el viaje, impartió una conferencia magnífica.「彼女は旅行でとても疲れていたが、素晴らしい講演をした」

という譲歩構文では、譲歩節と帰結節が推論の点から見れば対立していることがわかる。譲歩節からは帰結節で断定されていることに反する結果が推測できるのである。誰かが疲れていれば、その人の仕事は素晴らしくないことが多いのに、譲歩節が表現している反推論はその困難さが救済できることを示していて、結果として帰結節は譲歩節が意味する期待を否定している (2009: § 47.12a) ¹⁵⁾。

この NGLE の場合、期待が否定されるということは、事態が話者にとって想定外であることになる。その想定外の事態には2種類の解釈ができよう。話者が主観的に想定していなかった事態なら単なる驚きになって「肯定的追加」という語用論的意味に対応するし、話者が自身の持っている（客観的な想定と同じこともある）主観的な想定に反する事態だと判断するのなら「否定的追加」に対応する。NGLE にはこの2種類の解釈が考慮されていない。

他方、NGLE は、事実を表わす *aunque* の譲歩表現では、叙法選択を情報の新旧の視点から論じている (2009: § 25.13i)。

2.3.2.2. Veiga *et al.* の場合

Veiga *et al.* (2006: 108-9) は「譲歩の関係とは、2種類の文の一方と他方の文の否定との間に想定される意味の関係に反するような、2種類の文の（論理的）結合の関係に過ぎない」という見方に基づいて、それを“($p \rightarrow \sim q$), $p \wedge q$ ”という論理式で表現している。具体的には、たとえば例文5だが、

5. aunque venga Julia, iremos al cine. 「フリアが来ても、私たちは映画に行こう」

ここでは p が「フリアが来ること」であり、 q が「我々が映画に行くこと」になるが、前もってその否定が想定される項を含んでいる。すなわち、この例文は「フリアの到来」が「我々が映画に行かないこと」を想定させるが、 p が実現すると q が否定されるという期待にもかかわらず、 q の実行が表現されているのである ¹⁶⁾。この Veiga *et al.* では、譲歩表現に関して筆者が提示する2種類の語用論的意味のなかの「否定的追加」にのみ言及されている。

なお, Veiga *et al.* (2006: 275) は, 事実を表わす *aunque* の譲歩表現では, 叙法選択を直説法現在と接続法現在の属性である客観性・主観性の中和が起こって両叙法が自由に入れ替わることになっているのではないか, という考え方を提示している。

2.3.2.3. 川口の場合

川口 (2012: 26-37) は「スペイン語学における譲歩構文の意味規定」を検討している。そして彼自身は, 譲歩構文 *Aunque p, q* の意味を「背景に存在する因果関係 (*Si p, no q*) に反する状況をあらわす」と一般化することを提案している (2012: 37)¹⁷⁾。

この川口の一般化でも, Veiga *et al.* と同じように, *aunque* が表現する焦点的事態の表示にまつわる 2 種類の語用論的意味のうち, 筆者の提案する「否定的追加」にのみ注目している。「肯定的追加」は考慮されていない。

他方, 川口は, 事実を表わす *aunque* の譲歩表現では, 叙法選択を譲歩の表現効果の視点から論じている。

2.3.3. *aunque* の叙法選択と尺度的表現

aunque の叙法選択については多数の先行研究が存在する。ここでは古典的な解釈 (2.3.3.1), スペイン語学研究成果の現状を詳述している NGLÉ の説明 (2.3.3.2), このテーマの専門家の見解 (2.3.3.3) を尺度的表現と関連させて紹介し, 筆者の仮説を確認することにする (2.3.3.4)。

2.3.3.1. Vallejo の解釈

Vallejo (1922: 49-50) は, まず, スペイン語の譲歩表現を, 基本的に叙法の違いによって 2 種類に分けた。たとえば「私は雨が降っても出かけるつもりだ」という表現なら, *aunque* 節に直説法動詞を使う *real* (事実の用法: *Saldré, aunque llueve.*) の場合と, 接続法動詞を使う *hipotético* (仮定の用法: *Saldré, aunque llueva.*) の場合である。しかし譲歩節の内容が事実であっても接続法が使われる場合にも注目する。そして Vallejo (1925: 66) では, このように使われる接続法を *subjuntivo polémico* (論争の接続法) と呼んでいて, *aunque* 節で表現される事柄は他人によって提示されたものであり, それに反論するために取り上げるときに使われるのである (話者は自身が表明した事柄に反論することもある), と述べている。

Vallejo の「論争の接続法」は他人によって提示された事柄であっても自身が表明した事柄であっても, それに反論するために取り上げるときに使われる, という解釈である。反論ということならば, 非話者や話者が想定した事態に関して反対意見を述べることになる。*aunque* の 2 種類の尺度的表現と対比すると, Vallejo はその「否定的追加」にのみ言及していることになる。

2.3.3.2. NGLE の説明

スペイン文法について、これまでに論じられてきた研究の流れのなかで大勢を占めている見解をまとめて詳述する NGLE によれば, aunque 節における叙法選択の仕組みはどのように理解されるのであろうか。

まず, 譲歩構文で扱われる事態の真実性 (veracidad) という基準に従えば, その譲歩節は仮定の (hipotética) 譲歩と事実の (factual) 譲歩が区別される。仮定の譲歩ではほぼ「～を仮定しても」の意味に相当して接続法の動詞が使われ, 事実の譲歩では「そのような場合であっても」に近い意味に相当して直説法の動詞が使われたり接続法の動詞が使われたりする (§ 47.13a)。その叙法選択の仕組みは以下のようになる。

A. 仮定の譲歩表現

§ 25.13h によると, 仮定の譲歩表現では接続法の動詞が選ばれる (例文 6)。

6. Aunque la mona se vista de seda, mona se queda.¹⁸⁾「雌猿は絹の衣装を身に着けても, 雌猿でしかない」

B. 事実の譲歩表現

そして, 事実の譲歩表現では例文 7 のように直説法も接続法も使われる。

7. Aunque lo [intento ~ intente] todos los días, nunca consigo hablar con él.「私は毎日試みても, 彼とは全然話ができない」

NGLE (§ 25.13i) によると, 一般的に, この場合の叙法選択には文の情報構造が機能していると認識されている。すなわち, 譲歩節の事態が旧情報であれば接続法が選ばれる。ということとは, 譲歩節の事態が旧情報でなければ, 直説法が選ばれる, ということになる。

NGLE が紹介している解釈には, Vallejo が考えている「反論」のような談話形式の視点はない。また, aunque が表現する譲歩というレトリックの文彩にも言及されていない。それゆえ筆者が提示する aunque の尺度的表現にはかかわりがない。話し相手も知っている情報 (旧情報) であれば接続法が選ばれるということであるが, 実例では旧情報であっても直説法が選ばれることがあるからには¹⁹⁾, NGLE の説明には説得力があるとは言えない。

2.3.3.3. 福島の結論

福島 (1998) は多くの先行研究を検討した結果, aunque 節が事実を表すときに接続法を使う理由に関する仮説を「同節は前提となる副情報を表す」とするもの (第 1 説), 「同節は話し手

と聞き手の間の意見対立を示す」とするもの（第2説）、「同用法は特殊なものとみなすに当たらない」とするもの（第3説）、の3種類に大別した。そして、「これらのうち、どれが事象を最も適切にとらえているだろうか。或はこれ以外の新たな仮説を追及する必要があるのだろうか」と問いかける（1998: 38）。その結果、福寫（2004: 129）は第1説が最も有力であることを認め、「『第1説』を採りつつも、そこに『第3説』を融合させることを提唱」し、「事実を表す *aunque* 節に接続法が用いられる場合は、その節が『副情報』、即ち主たる情報を支える背景（background）の情報を担う」と述べている。そして福寫（2019: 104）では以下のような「*aunque* 節の叙法選択規則」を提案している。

- a. *aunque* 節が「事実だと断定し、聞き手にむけて主張する」内容を表す場合、叙法導入辞 *aunque* は直説法を導入する²⁰⁾。
- b. *aunque* 節が「①疑惑、または②前提事実を表し、事実だという断定・主張をしない」場合、叙法導入辞 *aunque* は接続法を導入する。②の場合、*aunque* 節は主節の情報を支える副次的情報を表す²¹⁾。

福寫の「副情報（副次的情報）」という提案²²⁾でも、NGLEと同じように、*aunque* が表現する譲歩というレトリックの文彩には言及されていない。それゆえ筆者が提示する *aunque* の尺度的表現にはかかわりがないことになる。

とはいえ、上記の提案では、*aunque* 節が事実だという断定・主張をする場合は叙法導入辞 *aunque* が直説法を導入し、それをしない場合は接続法を導入する、となっている。「事実だという断定・主張をする／しない」という発話姿勢に、「話者が持っている情報と矛盾しない／する」という認識が関連付けられるならば、福寫の提案は筆者の *aunque* の尺度的表現という提案と繋がっていることになろう。ただし、福寫（2019: 31）には「接続法は、叙法導入辞に依存し、これによって文中での使用が決定される」とあるが、*aunque* が直説法動詞も接続法動詞も誘引する叙法導入辞であるという点に、ある種の疑義が生じる。叙法導入辞とはどちらかの叙法を誘引する要素であるからである。

2.3.3.4. *aunque* の叙法と2種類の語用論的意味

筆者は本稿の1.3.で、*aunque* 節における叙法選択の仮説を紹介した。それは、①譲歩節の内容が現在・未来の推測の内容なら未知型の接続法が、②譲歩節の内容が現在の事実であって話者が主節と譲歩節の内容が矛盾しているように思うときには意外型の接続法が、③譲歩節の内容が現在の事実であって話者が主節と譲歩節の内容が矛盾しているように思わなければ直説法が選ばれる、というものである。

この仮説を *aunque* の尺度的表現という視点から説明すると以下のようになる。①の場合、話

者が自身の認識のなかに、譲歩節で表現される事柄に関する情報を持っていないときであり、未知型の接続法が使われる。尺度的表現で説明されるのは②と③である。②の場合、話者の認識では、譲歩節の事態のときには主節の事態が起こらないという想定が成されているが、譲歩節の事態が、話者の認識に反して、主節の事態の成立条件になっていて、自身の持っている成立条件と矛盾する。この状況は *aunque* の「否定的追加」という語用論的な意味に対応し、意外型の接続法が使用される。そして③はそのような矛盾が意識されないときであり、*aunque* の「肯定的追加」という語用論的な意味によって新たな焦点の事態が直説法で表現されるのである。

3. 筆者の仮説の検証

aunque で形成される譲歩節が事実を表すとき、その動詞は直説法にも接続法にもなる。未知型の接続法が使用される①については先行研究の多くが類似の解釈を行なっている。NGLE が「A. 仮定の譲歩表現」として紹介している見解 (2.3.3.2.) であって、筆者もこれ以上の検討は必要がないと判断している。依然として検討が必要なのは②と③の叙法選択の仕組みである。

3.1. 否定的追加の検証

本稿 2.3.2. から容易に判断できるように、否定的追加という語用論の意味が表現される可能性は大きく、その実際の用例も少なくない。CREA で検索して紹介しよう。たとえば次の 3 例である。

まず、新聞 (*Tiempo*, Madrid 版, 02/07/1990, タイトル: José Luis Corcuera/ Ministro del Interior) の政治関係の記事である。新聞社の局長たちと対決するのはおおよそ政治的ではないと言われた人が答える。

8. Aunque sea poco político, no quiero renunciar a la defensa vehemente de mis principios. 「ほとんど政治的ではないかもしれないが、私は自分の主義の強い擁護を放棄するつもりはない」

政治的ではないと言われたことを、それでも実行するという点で、矛盾を含む表現となっている。*aunque* 節の事柄は否定的追加の意味を表現している。

つぎに、料理本の記事 (Plasencia, P. & Villalón, T., *Manual de los vinos de España*, Everest, León, 1994) である。スープにワインを入れることについて述べている。

9. Aunque tenga sus detractores, la inmensa mayoría de los mortales gustan de un toque de vino en muchas sopas. 「批判する者が多くても、大多数の人たちは多くのスー

ブにワインを加えることが好きである」

好きな人がとても多いが反対に非難する人もいるという点で、矛盾（否定的追加）が表現されている。

あるいは、別の新聞のスポーツ記事 (*El mundo*, 29/04/1996; タイトル: Entrevista con Alberto Costa, Tenista; Madrid 編集部, 1996) である。世界ランキングは新聞記者だけが注目しているが、あなたはランキングを重視しているという指摘に対して、つぎのように答えている。

10. Aunque digan que no, los jugadores siempre estamos pensando en el ranking. 「そうではないと言われていても、私たち選手はいつもランキングのことを考えています」

実態と世間の見方の矛盾を述べている。否定的追加の例であろう。

3.2. 肯定的追加の検証

肯定的追加の用例も、CREA で検索した現代スペインの3例を紹介しよう。

まず、保険消費省の印刷物(タイトル: Informe de Evaluación de Tecnologías Sanitarias, núm. 23, 12/2000. 出版: Ministerio de Sanidad y Consumo. Instituto Carlos III. Agencia de Evaluación de Tecnologías Sanitarias (Madrid), 2000) の記事にある人工乳房の話である。

11. Aunque es difícil calcular el número exacto de mujeres con implantes en Europa, parece ser mucho menor que en EE.UU. 「ヨーロッパで人工乳房を持っている女性の正確な数字を計算することは難しいが、アメリカ合衆国よりもずっと少ないように思われる」

ヨーロッパで該当する女性の数がアメリカ合衆国よりも少ないように思われるということと、その正確な数を数えるのは難しいということは、なんら矛盾していない。数が少ないと思わせる事柄を成立させる付帯条件のひとつが加わった表現になっている。肯定的追加の例である。

つぎは新聞記事 (*Tiempo*, 15/01/1990; タイトル: Mayra Gómez Kemp / Vuelve a repartir premios, pero ahora desde antena 3; Ediciones Tiempo (Madrid), 1990) である。

12. No creo que España sea un país pobre. Aunque tiene bastante inflación es el país europeo que más desarrollo económico está teniendo. 「私はスペインが貧しい国だとは思わない。(スペインは) インフレは大きいですが、最も大きな経済発展をしつつあるヨー

ロッパの国である」

経済発展とインフレの両立は可能であり、矛盾しない。スペインの経済発展のひとつの背景にインフレが加わっているだけである。肯定的追加の例となろう。

小説の記述 (Sánchez Dragó, F., *El camino del corazón*; Planeta (Barcelona), 1993, p. 15) にも用例がある。

13. Aunque está acostumbrado a ganar, siempre ha sabido perder.「彼は勝ち慣れているが、負けてもつねに悪びれない」

勝ち慣れている人でも負けることはあろう。潔い負け方と勝ち慣れていることは矛盾しない。負け方がいいことの関連状況のひとつに、勝ち慣れていることが加わっているだけである。aunque が表現している語用論的意味は、主節の事態との矛盾（否定的追加）ではなくて、主節の事態が成立している事情としての肯定的追加になろう。

3.3. アンケートによる検証

実際の用例では、筆者の仮説を検証するための情報が明確に記述されていることは少ない。上記の 3.1. や 3.2. の用例の場合でも、話者（著者）が叙法を選択するときの本当の心的状態は不明である。あくまで記述のみを手掛かりにした筆者の判断に従って文意を解釈した。筆者の解釈に異論も出されよう。それゆえ、筆者の仮説を具体的に検証するために、選択肢（直説法動詞形と接続法動詞形）を含む 3 種類の例文を作り、それぞれに 2 種類の発話条件をつけ、選択肢を選んでもらうようなアンケートを作成し、日本に在住する 20 人の成人スペイン人に尋ねてみた²³⁾。

用例は以下の 3 種類である。

14. Aunque (está esté) lloviendo, voy a dar un paseo.「雨が降っていても、私は散歩をするよ」

15. Aunque (soy sea) español, no me gustan los toros.「私はスペイン人だが、闘牛は好きでない」

16. Aunque (estoy esté) enfermo, estoy trabajando.「私は病気ではあるが仕事をしている」

アンケート用紙には、最初に「(例文の) 括弧に入っているふたつの選択肢の中で、各設問の初めに書かれている条件に一層適していると思われるものを選んでください」²⁴⁾ というように、

選択するときの発話条件の設定の存在を明記した。設問ではすべて、*aunque* 節で述べられている事柄が話し相手も知っている情報（旧情報）であることを断っておいた。筆者は発話条件によって *aunque* の語用論的意味である「否定的追加」（接続法）と「肯定的追加」（直説法）に誘導しようと意図した。今回のアンケートの結果から、筆者の発話条件の設定に問題があった例（3.3.1.）、検証に有意義な例（3.3.2.）を紹介することにする。そして最後に検証の結果を吟味する（3.3.3.）

3.3.1. 発話条件の設定に問題があった用例

上記の3種類の用例についてそれぞれ2種類の発話条件の設問を立てて尋ねた。そのうち、2種類の用例（15と16）について設定した発話条件に問題のあることがわかった。そのひとつは、この研究テーマでよく使用される用例15. *Aunque (soy sea) español, no me gustan los toros.* である²⁵⁾。2種類の発話条件は、アンケートでは設問3と設問4である。

発話条件は、設問3では「あなたはスペイン人であって話し相手もそれを知っている。スペイン人は皆、闘牛が好きだと言われており、あなたもそう思う。しかし言う」²⁶⁾であり、設問4では「あなたはスペイン人であって話し相手もそれを知っている。スペイン人は皆、闘牛が好きだと言われているが、あなたはそう思わない。そして言う」²⁷⁾である。筆者は、設問3では話者が「スペイン人なら闘牛が好きだ」という認識に矛盾するので「否定的追加」の表現になって意外型の接続法 *sea* が選ばれ、設問4ではそのような認識がないので「肯定的追加」の表現になって無標の直説法 *soy* が選ばれると予測した。しかしアンケートの結果はその期待を裏切るものであり、設問3で予想通りに *sea* を選んだのが20名のなかの7名で *soy* を選んだのが13名であり、設問4では予想通りに *soy* を選んだのが5名で残りの15名は *sea* を選んだ。この結果を検討した結果、筆者はこのアンケートの叙法選択を以下のように解釈する。

まず、このような発話条件の設定には筆者の意図がうまく反映されていない、ということが判明した。発話条件は「スペイン人は皆、闘牛が好きだと言われており、あなたはそう思う・そう思わない」であるが、この条件では、「スペイン人は闘牛が好きだ」ということとスペイン人である話者が「自分は闘牛が好きだ」と認識することが、必ずしも直結していないのである。

設問3の場合、「スペイン人は闘牛が好きだ」という認識と「(スペイン人である)自分は闘牛が好きでない」という2種類の認知要素が矛盾する認知的不協和 (cf. 1.2.) の心的状態であれば、筆者が予測したように「否定的追加」の *aunque* が使われて意外型の接続法 *sea* が選ばれるであろう（7名の場合）。そして、話者が非話者の認識とは別に「自分は闘牛が好きでない」と認識していれば、自身がスペイン人であることが「闘牛が好きでない」という事態が成立するときの状況がひとつ増えるということを伝える、単なる「肯定的追加」になり、直説法 *soy* が選ばれることになろう（13名の場合）。

設問4の場合、話者は「スペイン人だからといって闘牛が好きだとは限らない」と認識して

いる。「スペイン人であること」は自分が「闘牛が好きでない」ことの否定的条件になっていない。「スペイン人である」という条件が「闘牛が好きでない」事態の成立する単なる「肯定的追加」となるのなら、筆者が予測したように直説法 *soy* が選ばれるであろうし（5名の場合）、「スペイン人である」という条件が「闘牛が好きでない」事態に反することにならないと認識していれば、「スペイン人なら闘牛が好きだ」ということは話者の認識に矛盾することになり、*aunque* 節には「否定的追加」を表わす意外型の接続法 *sea* が選ばれるのであろう（15名の場合）。

なお、発話条件の設定に問題があった用例のふたつめは、Borrego *et al.* (1989: 166) の例文を応用した用例 16. *Aunque (estoy esté) enfermo, estoy trabajando.* であるが³、用例 15 と類似の結果になった。接続法動詞に誘導するつमりの設問 5「あなたは友達と電話で話していて自分は病気だと伝える。一般に病人は仕事しないとされていてあなたもそう思っている。そして言う」²⁸⁾ では、20名中 12名が *estoy* を、8名が *esté* を選んだ。そして直説法動詞に誘導するつमりの設問 6「あなたは友達と電話で話していて自分は病気だと伝える。一般に病人は仕事しないとされている。しかしあなたは働くことがとても好きで病気など問題ではない。そして言う」²⁹⁾ では、9名が *estoy* を選び、11名が *esté* を選んだ。一般的な認識と話者自身の認識とを明確に判別できない発話条件であった。

3.3.2. 仮説を検証できる用例

選択肢を含む 3 種類の用例の残りの 1 例は、その発話条件の設定が叙法選択に関する筆者の予測にかなうものであった。例文 14. *Aunque (está esté) lloviendo, voy a dar un paseo.* である。発話条件は設問 1 と設問 2 である。

設問 1 では「いま雨が降っていて、あなたも話し相手もそのことを知っている。あなたは、一般的に雨だと散歩しないことを知っているが、今日は雨でも散歩しようという気になった。そして言う」³⁰⁾ であり、設問 2 では「いま雨が降っていて、あなたも話し相手もそのことを知っている。あなたは散歩が好きであり、雨降りの散歩も大好きだ。そして言う」³¹⁾ である。

設問 1 なら、話者は「雨だと散歩しない」という一般的な認識を持っている。そのうえで「雨でも散歩する」気になったのだが、この場合、降雨は、話者が散歩の条件として認識している条件と矛盾する。筆者の仮説では、その条件としての矛盾が意外型の接続法 *esté* で表現される。すなわち、*aunque* 譲歩節の「否定的追加」という語用論的意味が表現される。アンケートでは筆者の予測通り、20名のなかの 17名が接続法 *esté* のほうを選択した。しかしこのような発話条件であっても、話者が一般的な常識を考慮しないで自分の散歩のことだけを考慮して発話するのなら、散歩の条件がひとつ増えただけであることを表現するために「肯定的追加」に対応する直説法 *está* が選ばれることになる。残りの 3名は直説法動詞を選択した。

設問 2 では、「雨だと散歩しない」という一般的な認識が発話条件の中に入っていない。話者

は散歩が好きで、散歩するときの条件に雨降りという条件がひとつ加わっていることが表現される。筆者の仮説では、このような場合、*aunque* は「肯定的追加」という語用論の意味を表現するので、無標の叙法である直説法 *está* が選ばれることになる。アンケートでは 20 名のなかの 14 名がこの動詞を選択した。しかし筆者の解釈では、もし話者が発話に際して「雨だと散歩しない」という一般的な認識を考慮していれば、降雨という条件に関して自身の発話とその一般的な認識が矛盾する（認知的不協和になる）ことになり、その矛盾が「否定的追加」の意味として意外型の接続法 *esté* で表現されることになる。残りの 6 名はこの接続法動詞を選択した。以上のような動詞形の選択の結果は次の表ようになる。

20 名の選択の結果

例文	設問	直説法	接続法
14	1	3	17
	2	14	6
15	3	13	7
	4	5	15
16	5	12	8
	6	9	11

3.3.3. 検証の結果の吟味

上記で 3 種類の検証を行なった。この結果を吟味すると、以下のような指摘が可能であり、しかも必要であると考えられる。

3.3.3.1. 2 種類の譲歩文

日常言語の推論を論じる坂原（1985: 139）は、「*p* ならば *q*」という通常表現でありながら、通常の条件文と異なり、近似としてさえ真理関数 $p \supset q$ という論理構造をもたない言語形式」を疑似条件文と呼んでいる。そのことと関連して、「条件文、理由文、反事実的条件文の暗黙の前提が満たされないときには、それらは否定され、譲歩文になる。例えば、「*p* であっても $\sim q$ 」については、明示されない何らかの原因 *r* があり、そのために *p* が期待される *q* という結果を引き起こせない。これが通常の譲歩文の構造である」（1985: 157）と説明している。例えば条件文「晴れていれば散歩に行く」（「*p* ならば *q*」）があるとすると、頭痛という原因（*r*）があって「晴れていても散歩に行かない」とき、これが譲歩文となる。そして「疑似譲歩文 “*p* であっても *q*” では、*q* のために *p* はある結果を引き起こせない」（1985: 158）と指摘している。

他方、川口（2012）は譲歩構文 *Aunque p, q* の意味規定を、「背景に存在する因果関係（Si *p*, no *q*）に反する状況をあらわす」と一般化することを提案している（2012: 37）。そして「2.2 譲

歩構文の多義性」で、そのような命題 p と q との関係が成立する構文に見られる命題の提示を「直接対比」とすると、そのような関係が成立しない命題の提示の場合を「間接対比」と呼んでその詳細を論じている。坂原の譲歩文が川口の直接対比に、坂原の疑似譲歩文が川口の間接対比に対応することになる。

aunque はこのような2種類の譲歩表現を行なっていることになる。そして筆者が2.3.1. で提案している *aunque* の語用論的意味は、基本的に、「否定的追加」が川口の直接対比に、「肯定的追加」が川口の間接対比に対応していることになる。

3.3.3.2. 矛盾の存在の認識

川口の直接対比では、譲歩文は *Si p, no q* であるときに *Aunque p, q* という意味を表現する。 p と q の間の矛盾 (*no q* と q) が問題なく認識されていることになる。本稿の3.1. (否定的追加の検証) で挙げた用例8, 9, 10は川口の直接対比を表現しており、その p と q の間の矛盾は容易に認識される。

他方、川口の間接対比では、*no q* が直接的に q とならない対比である。 p と q の間の矛盾が認識されにくい。間接対比は、基本的に、筆者の肯定的追加に対応するが、話者の認識の仕方によって、間接対比でも p と q の間の矛盾が認識される可能性がある。たとえば筆者が本稿の3.2. (肯定的追加の検証) で挙げた用例11, 12, 13の場合、例文11では、正確な数字を出すのが難しいのなら多い少ないは言えないのに少ないと言っているところに矛盾の存在を認める可能性があるし、例文12では、インフレは経済発展を阻害する現象であるとするこの両者は矛盾すると考えられる可能性がある。また、例文13では、勝ち慣れていることとそれでも負けることがあることが矛盾するという解釈も可能であろう。

筆者の、事実を表わす *aunque* 節における叙法選択に関する仮説では、話者は、矛盾があると認識すれば接続法動詞を選ぶであろうし (否定的追加)、矛盾がないと認識すれば直説法動詞を選ぶであろう (肯定的追加)。その点を考慮して仮説を検証するために、上記のような矛盾の認識のずれを回避できるような工夫をしてアンケート (3.3.) を行なった。

3.3.3.3. アンケートの結果と先行研究の仮説

実際の用例による仮説の検証を消極的な検証とすれば、今回のアンケートによる仮説の検証は積極的な検証になる。アンケートでは少なくともひとつの用例とその2種類の発話条件 (設問) において (3.3.2.), 仮説が有効であることがわかった。では、事実を表す *aunque* 節に接続法が用いられるときの筆者の仮説 (1.3.) の検証の結果から判明したことを、福寫が分類した3種類の仮説と対比すると、どのようなことが判るのであろうか。

福寫の考察 (2.3.3.3.) では、先行研究は第1説 (譲歩節は前提となる副情報を表す)、第2説 (譲歩節は話し手と聞き手の間の意見対立を示す)、第3説 (同用法は特殊なものではない) の

3種類に大別されるが、福寫は結論として、第1説（副情報）を採りつつ、そこに第3説を融合させることを提唱している。そして、「これらのうち、どれが事象を最も適切にとらえているだろうか。或はこれ以外の新たな仮説を追及する必要があるのだろうか」と問い掛けている。

まず、第1説についてである。20名から回答を得た筆者のアンケートでは、どの質問でも、譲歩節の事柄は話し手も話し相手も知っていること（旧情報であること）が発話条件で規定されている。譲歩節の事柄は旧情報であり、話者が提示する情報の主・副という解釈では従属節の事柄であるから副情報になる。検証では、*aunque* 節の事柄の表現に直説法動詞も接続法動詞も選択された。旧情報（副情報）が直説法動詞で表現されているのであるからには、「接続法なら旧情報」という主張は受け入れられないことになろう。第2説は、話し手と聞き手の間の意見対立を理由とするが、その理由を、発話条件で聞き手の意見に言及されていないアンケートの例文と対比することはできない。例文14では、聞き手の意見に関係なく、話者が独自の語用論的意味をふたつの叙法で表現しているので、接続法を選ぶときの理由として挙げられている聞き手との意見の対立は、直接的な選択理由にはならない。そして、第3説は接続法の選択を特殊なものみなさないとする。筆者の仮説では、例文14で *aunque* 節に選ばれる接続法は、「否定的追加」という語用論的意味を表現する意外型の接続法に属するので、筆者の仮説は福寫の第3説に属するのかもしれない。しかしまた、意外型の接続法は従属節の命題だけについて設定する仮説であれば、問題の *aunque* 節で主節の命題との関連で選択されるとする接続法という仮説（話者の認識における、主節の事柄の成立条件と従属節の事柄との間の矛盾の表現）は、特殊なものみなされるかもしれない。そうなれば、福寫の問い掛けには、3種類の仮説のほか新たな仮説を提示する、と答えることになろう。

福寫の考察の3種類の仮説に関しても新たに指摘しておくべき傾向の存在がうかがわれる。まず、アンケートによる検証では、筆者の仮説の有効性については、あるともないとも言える結果があった。20名に対して行なった6種類の設問ですべて筆者の予測通りの選択をしてくれたのは2名だけであったし、設問すべてで筆者の予想に反する選択をしてくれたのも2名あったからである。また、6種類の設問すべてに接続法動詞を選択した人が1名、5種類の設問に接続法動詞を選択した人が1名いた。問題の叙法選択では、まずは無条件に接続法動詞を選択する人もいるようである。他方、アンケートに付けられたコメントとして、6種類の設問のほとんどで直説法動詞も接続法動詞も選択できると指摘してくれた人がいた。Veiga *et al.* (cf. 2.3.2.2.) が提起している叙法交替の中和の解釈である。明確な叙法選択の基準を持たない話者が存在するのかもしれない。

上記の3.3.3.2.（矛盾の存在の認識）で、事実を表わす *aunque* の譲歩構文は、論理的には直接対比でも間接対比でも主節の事態と従属節の事態との間に矛盾の存在を指摘することができることと、いずれの対比の場合でもそのような矛盾を認識する話者と認識しない話者が存在することが想定された。そしてアンケートの結果は、その想定を支持するものであった。事実を表

わす aunque の譲歩構文における叙法選択に関する筆者の「話者が主節と副詞節（従属節）の内容が矛盾しているように思えば接続法動詞が、そして矛盾していると思わなければ直説法動詞が選ばれる」（cf. 1.3.）という仮説は、まさに、話者がそのような矛盾を主観的に認識するかどうかという区別に直結している。譲歩という表現が文法によって規定されるのではなくて話者の表現意図によって決まるレトリックの文彩の一種であれば、その叙法選択が話者の語用論的な主観的判断に左右されるという仮説の根拠が是認されるであろう。

なお、話者の主観的判断という視点に関連して、Vallejo のいう「論争の接続法」（2.3.3.1.）の解釈のように、叙法を含む非話者の発話内容が再現されるという関連性理論のメタ表示の現象も考慮する必要があるであろう（cf. Miyoshi 2017, 三好 2019）³²⁾。

4. おわりに

筆者はスペイン語の aunque による譲歩表現の従属節の叙法選択に関する自身の仮説を検証した。語法に関する仮説の検証は、実際の用例を利用して行なうべきであろう。そこで 3.1. や 3.2. で該当する用例を挙げた。しかし記述資料の場合、問題の筆者の仮説が依拠する語用論的な意味は発話主体の認識のなかにあって、ほとんど文面には現れない。それゆえ、さらなる検証のために人工的な用例と発話条件を設定してアンケートの形で検証することにした。ネイティブが筆者の発話条件をどのように理解してくれたかは不明である。各自が筆者の発話条件を自身の選択基準と照合して叙法を選択してくれた。各自の選択基準も不明のままである。もとより本稿で報告する検証によって筆者の仮説が客観的に十分容認されることになるとは思われないが、仮説の成立する可能性の存在は検証された。

aunque 節の叙法選択に関する筆者の仮説（1.3.）は、今回の検証の結果を加えれば以下のようになろう。

- ① 譲歩節の内容が現在・未来の推測の内容なら、未知型の接続法現在の動詞が使用され、通常の譲歩文を表現する。
- ② 譲歩節の内容が現在の事実であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思うときには、意外型の接続法現在の動詞が使用され、通常の譲歩文を表現する。
- ③ 譲歩節の内容が現在の事実であって、話者が主節と副詞節の内容が矛盾しているように思わなければ、無標の叙法である直説法現在の動詞が使用され、疑似譲歩文を表現する。

本稿の検証の結果、日本のスペイン語学習者が問題の叙法選択の際に筆者の仮説に従っても、スペイン語話者が学習者の発話意図を大きく誤解することはない、ということと言えるであろう³³⁾。

注

- * 本稿は2019年6月22日に開催された関西スペイン語学研究会にて口頭発表し、いくつかの有益な指摘を受けて書き改めることができた。指摘くださった先生方に、ここに記して感謝申し上げます。
- 1) スペイン語の叙法とそのモダリティについては三好(2019)の第1節で論じた。
 - 2) 和佐(2016: 180)はDelancey(2001)の提唱する *mirativity* (和佐の訳では「驚嘆性」という文法範疇の概念から想を得て、接続法が表現する事態に関する心的態度のひとつに「話し手にとって思いがけない事態であるため、真であるとは受け入れ難い」という心的態度」を仮定している。「真であるとは受け入れ難い」心的態度が話者の認識と矛盾することから生じるとするならば、筆者が仮定する意外型の接続法は、和佐の想定するこの心的態度を表現していることになる。
 - 3) 日本認知科学会(2002: 646)の定義。この概念を提出したFestingerは、「矛盾」ということばを論理的内包の少ない「不協和」という言葉に置き換えている(フェスティンガー 1965: 3)。
 - 4) このことに関連して、福嶋(2002)に興味深い指摘がある。福嶋は「～であること」節(*el hecho de que*などの節)で使われる接続法について、先行研究にはそれが旧情報を表わすという見方があるが、実際の用例を観察して、その節のなかで接続法を使って表現されている事柄のなかには、聞き手(読み手)がまだ認識していない(旧情報ではない)事柄もあることを指摘した。そして旧情報の代わりに「副情報」という術語を提案している。話者が聞き手の認識とは無関係に、主観的に設定する独自の情報価値を指す術語であろう。
 - 5) Corominas(1980: 72).
 - 6) García de Diego(1970: 409).
 - 7) 本稿の例文には独自の番号を付す。
 - 8) SALAMANCA(1996: 154).
 - 9) NGLE(2009: § 40.8b)の説明。数学の用語 *magnitud escalar* 「スカラー量」で使われる *escalar* を「尺度の」と訳しておいた。その量の大きさは方向性を持たずに数的な意味でのみ表わされるからである。
 - 10) 実際の用例のなかにも双方の追加の表現が見られる。CREAには以下の用例が記載されている。[肯定的追加] *En Madrid precisamente vive Balbina Barrios [...], y en Madrid y en Bilbao y en Barcelona y en Suiza y aun en Australia y en Nueva York, viven también muchos otros ex vecinos de Hilario* 「正確にはマドリッドにバルビナ・バリオスは住んでいた。そしてマドリッドにもビルバオにもバルセロナにもスイスにも、そしてオーストラリアやニューヨークにさえも、イラリオのその他の、かつての多くの隣人は住んでいる」(Novela de Landero, L. (1993), *Juegos de la edad tardía*, Barcelona, p. 340)。[否定的追加] *Angelina le había dicho que quizá pudiera ayudarlo, pero aun en el caso de que no lo hiciera no tenía nada que perder.* 「アンヘリナはかつて彼に、多分助けてやることのできるだろうと言っていたが、そうしてやらないときにさえも、彼は失うものが何もなく」(Novela de Llamazares, J. (1995), *El río del olvido*, Barcelona, p. 101)。
 - 11) Cf. NGLE (§ 47.2n).
 - 12) Cf. NGLE (§ 47.12a).
 - 13) Cf. NGLE (§ 47.2ñ).
 - 14) とはいえ、この *aunque* の語用論的意味の肯定的追加も否定的追加も認めないような指摘が存在する。López García(1994: 182)である。彼は *aun* の尺度的表現に言及したあと、*Lo que importa notar es que la idea de esta gradación llevada hasta el extremo se pierde en el caso de aunque, donde sólo queda el valor de contradicción* 「注意しなくてはならないことは、この先端までもっていく段階付けの概念は *aunque* の場合には失われていることであり、そこでは矛盾の意味価値が残っていない」と述べている。この指摘の当否の判断には、本稿の検証の結果を考慮するべきであろう。他方、この著者は、事実を述べる *aunque* 節における叙法選択についてはVallejo(cf. 2.3.3.1.)に言及して

- メタ表示的な考え方 (cf. 三好 2019) を採用し、その事実に関して話し手と話し相手の間に同意があれば直説法動詞が選択され (確認型)、同意がなければ接続法動詞が選択される (論争型)、と考えている (1994: 171-2)。この仮説は、福島の3分類 (cf. 2.3.3.3.) のなかでは第2説に相当しよう。
- 15) その期待の否定は厳密に語彙的な知識であったり (耳鼻咽喉科医が耳鼻科の治療だけをする、とか)、百科事典的な知識であったり (信者なのに日曜日にミサに出ない、とか)、それぞれの地域の文化的知識であったり (イタリア人なのにパスタが好きでない、など) する (2009: 47.12d)。なお、筆者は、例文4と例文2との解釈の違いは、あくまで話者の判断によると解釈する。
 - 16) 坂原 (1985: 133) は、条件文の否定との関係で譲歩文のことを論じていて、条件文 “ p ならば q ” の否定を3種類にまとめている。それらは過大評価 (p でも $\sim q$)、無関連 ($\sim p$ でも q)、誤解 (p ならば $\sim q$) である。Veiga *et al.* は “ ($p \rightarrow \sim q$), $p \wedge q$ ” (p ならば $\sim q$ だが, $p \wedge q$: p かつ q) と述べている。坂原の言う過大評価の一種となろう。
 - 17) 川口は *Si p, no q* の否定を提案している。この形式は「 p ならば q でない」であるから、その否定 (「 p でも q 」) は坂原の言う過大評価の変種となろう。ちなみに、筆者の「否定的追加」は川口と同じく、坂原の過大評価の一種となり、「肯定的追加」は坂原の言う無関連の一種となろう。
 - 18) この例文は NGLE の §47.13a のものである。
 - 19) 本稿の第3節を参照のこと。
 - 20) 叙法導入辞 (inductor modal) とは NGLE (2009: §25) の概念である (福島 2019: 9)。
 - 21) 福島の提案は4点である。c は福島 (2019: 29) が提案する「スペイン語の叙法の機能分担規則」から導かれること、d もその機能分担規則に則っていることが断られている。
 - 22) 福島氏にメールで確認したところによれば、*aunque* 節に直説法が採用されるときには、従属節 (譲歩節) も主情報を表現していると考えられている。一般的に従属節は主節 (主情報) に関する副情報を表現する。複文を構成する *aunque* 節の場合、主節に後置されると逆接の意味の接続詞 *pero* と同値の意味になることがある。その場合ならば、重文的解釈も可能になり、直説法動詞を伴う *aunque* 節が主情報を表わしているという解釈も可能になろう。しかし直説法の *aunque* 節が主節に前置されるときにも主情報を表わすことが可能になるのであろうか。
 - 23) アンケートは、まず、神戸市外国語大学の川口正通先生に依頼して6名のスペイン人に対して3回も行なってもらった。さらに、その2度目のアンケートを、京都大学の塚原信行先生、愛知県立大学の糸魚川美樹先生、上智大学の西村君代先生に依頼した。そして合計20名からの回答を得ることができた。注ではあるが、ここに記して先生方の温かいご協力に心から感謝申し上げます。
 - 24) «Seleccione, por favor, una de las dos opciones puestas entre paréntesis, si usted la cree más apropiada para la condición que se lee al principio de cada apartado».
 - 25) 和佐 (2016: 179) はこの接続法の方の例文を挙げて、その「従属節では直説法を使用するのが一般的だが、接続法を使用すると、 p (「私はスペイン人だ」) が背景化されることによって、前景化された q (「闘牛が好きではない」) が強調されることになるものと考えられる」という見解を述べている。今回のアンケートの結果、その叙法選択は発話条件によって、本文の以下で述べるような揺れの存在が明らかになった。なお、福島 (2019: 111-2) に *Claro que soy español, pero aunque |a. soy / b. sea| español no me gustan los toros.* 「もちろん私はスペイン人だが、スペイン人なのに闘牛が好きではない」という用例で行われたアンケートの結果が紹介されている。それによると、スペインで、私も直説法を使うと答えた107名に対して、184名が、私も接続法を選ぶ、と答えている。
 - 26) «Usted es español y su interlocutor lo sabe. Dicen que a todos los españoles les gustan los toros, y usted lo cree. Pero dice».
 - 27) «[...], pero usted no lo cree. Y dice».
 - 28) «Usted está hablando con su amigo por teléfono, y le dice que usted está enfermo. Dicen que generalmente los enfermos no trabajan, y usted también lo cree. Y le dice».
 - 29) «[...]. Pero a usted le gusta mucho trabajar, y no le importa la enfermedad. Y le dice».

- 30) «Ahora está lloviendo, y usted y su interlocutor lo saben. Usted sabe que generalmente no pasean cuando llueve, pero hoy se le ocurre pasear a pesar de la lluvia. Y dice».
- 31) «[...] A usted le gusta pasear, y le encanta también el paseo bajo la lluvia. [...]».
- 32) 論理式について断っておくことがある。筆者が仮定する *aunque* の否定的追加は、3.3.3.1. で紹介した坂原の「通常の譲歩文」“*p*であっても $\sim q$ ”を表現している。その表現構造を、たとえば *Veiga et al.* は “($p \rightarrow \sim q$), $p \wedge q$ ” という論理式で説明している (cf. 2.3.2.2.)。他方、肯定的追加を表現する *aunque* は、*Veiga et al.* にならって論理式で表わすことは難しい。話者の認識のなかに、*q* の成立条件として *p* が存在しなかったからである。しかし、あえて表せば、「 p implies q . p は q を包含する」という意味で “($p \Rightarrow q$), $p \wedge q$ ” ということになる。そうなると、もはや典型的な譲歩を表現していることにはならない。坂原の言う疑似譲歩文 “*p*であっても q ” だからである。

なお、*aunque* の肯定的追加に対応する日本語についても注記しておきたい。

辞書に記載される接続詞 *aunque* の基本義は、譲歩であるとするものや(たとえば *SALAMANCA*)、逆接と譲歩に大別するものがある (DLE など)。後者では、たとえば高垣 (監) の辞書がある。その項目 *aunque* では、第1義が「(+直説法) (事実と認めて、逆接) …ではあるが、…とはいえ。 *Aunque hace buen tiempo, no quiero salir de casa.* いい天気だけれども外出するのはいやだ」とあり、第2義が「(+接続法) (譲歩) (1) (+接続法現在) (仮定、あるいは事実を仮定的に述べて) たとえ…でも、確かに…かもしれないが」である。第1義の例文では、好天なら外出するという想定に矛盾する否定的追加を表現していると解釈することができるが (逆接)、外出したくない理由が存在していて、好天という事態が外出を嫌うことの、その付帯状況のひとつの肯定的追加であると解釈する可能性もある (逆接ではない)。

他方、上田ほか (編) の辞書の項目 *aunque* では、第1義が「(実際に) (直説法:…だ) けれども。 *Aunque es joven, sabe mucho.* 彼は若いがたくさん知識がある」であり、第2義が「たとえ (接続法現在:…) でも、…であるかもしれないが (譲歩を示す)」となっている。第1義「けれども」には逆接という指摘はない。逆接よりも緩やかな表現をしているということではなからうか。西尾ほか (編) の国語辞書では、「逆接」とは「甲・乙二つの文または句の接続のしかたで、甲が成り立てば普通乙は成り立たないというものを、あえて結びつけるもの」であって「けれど (も)」などで表現され、この接続助詞は「実際に起こった、または確かな事柄を挙げ、それにもかかわらず (普通にはこれと矛盾するような) 他の事柄が成り立つ意を表す」とあるが、上田ほか (編) の第1義は、この定義の「(普通にはこれと矛盾するような) (否定的追加) だけでなく、「(矛盾するとは思われない) (肯定的追加) も考慮しているのではなからうか。他方、日本語「けれども」の語義を緩やかに定義する国語辞書に北原 (編) があるが、その定義は①「対比的な関係にある二つの事柄を結びつける」、②「前置きを示す」であり、ともに「…が」と同義である。上田ほか (編) の *aunque* の第1義はこの緩やかな定義の「けれども、…が」に対応することになるのかもしれない。そして、もしそうであれば、筆者の仮説である *aunque* の肯定的追加の意味は、日本語ではこの「けれども、…が」が表現していると思われる。

- 33) 筆者は四半世紀以前にスペイン文法の教材を出版し、現役教員の時代には教育の現場で使用してきた (三好 1994, 2006)。この教材は様々な先生方にも使っていただいている。その6課 (譲歩節の叙法の選択のところ) で、筆者の仮説 (話者が、現在の事実について主節と副節節の内容が矛盾しているように思うときには接続法動詞が使われ、そう思わないときには直説法動詞が使われる) を出しておいた。根拠を示さないままの教授用の仮の文法規則であったが、ようやく本稿でその理論的根拠を明示することができた。

また、本稿の準備段階で、福嶋教隆先生と川口正通先生から貴重な指摘を受けた。とくに川口先生には資料の提供も受けた。お二人のご厚情に深謝致します。

参考文献

- 上田博人ほか(編)『プエルタ 新スペイン語辞典』, 研究社, 2006。
- 川口正通『現代スペイン語における譲歩表現の研究—構文文法の観点から—』(博士論文), 大阪大学言語社会学会, 2012。
- 北原保雄(編)『明鏡 国語辞典』, 大修館書店, 2002。
- 坂原茂『日常言語の推論』, 東京大学出版会, 1985。
- 高垣敏博(監)『小学館 西和中辞典(第2版)』, 小学館, 2007。
- 西尾実ほか(編)『岩波国語辞典 第6版』, 岩波書店, 2007。
- 日本認知科学会(編)『認知科学辞典』, 共立出版, 2002。
- フェスティンガー, L. (末永俊郎監訳)『認知的不協和の理論—社会心理学序説—』, 誠信書房, [1957] 1965。
- 福寫教隆「aunque 節中の叙法について(1)」, 『神戸外大論叢』, 49-2, pp. 29-43, 1998。
- 福寫教隆「イスパニア語の『～ということ』節における叙法選択について」, 『神戸外大論叢』, 53-6, pp. 1-25, 2002。
- 福寫教隆「aunque 節中の叙法について(2)」, 『神戸外大論叢』, 55-6, pp. 111-131, 2004。
- 福寫教隆『スペイン語のムードとモダリティ』, くろしお出版, 2019。
- 三好準之助『スペイン文法中級コース』, 白水社, 1994。
- 三好準之助『スペイン文法中級コース(改訂版)』, 白水社, 2006。
- 三好準之助「スペイン語の aunque 節の叙法選択について」, 京都産業大学論集人文科学系列, 第51号, pp. 207-229, 2018。
- 三好準之助「スペイン語の名詞節における叙法選択」, 京都産業大学論集人文科学系列, 第52号, pp. 207-229, 2019。
- 和佐敦子「スペイン語接続法と事態認知」, 山梨正明ほか(編)『認知言語学論考 No. 13』, ひつじ書房, pp. 163-184, 2016。
- Battaner Arias, P. (dirección científica). *Diccionario de uso del español de América y España*. Barcelona: Spes Editorial, 2002.
- Borrego, J. et al. *El subjuntivo. Valores y usos*. Madrid: SGEL, 1989.
- Corominas, J. *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*. Madrid: Gredos, 1980.
- Delancey, S. "The Mirative and eventuality", en *Journal of Pragmatics*, 33, pp. 369-382, 2001.
- DLE: Real Academia Española. *Diccionario de la lengua española*. Madrid: Espasa, 2014.
- García de Diego, V. *Gramática histórica española*. Madrid: Gredos, 1970.
- López García, A. *Gramática del español. I. La oración compuesta*. Madrid: Arco Libros, 1994.
- Miyoshi, J. "Selección modal y Ahern (2008)", en *Lingüística Hispánica*, 40, pp. 27-48, 2017.
- NGLE: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Libros, 2009.
- SALAMANCA: Gutiérrez Cuadrado, J. (dir.). *Diccionario SALAMANCA de la lengua española*. Madrid: Santillana, 1996.
- Vallejo, J. "Notas sobre la expresión concesiva", en *Revista de Filología Española*. Madrid: Instituto Miguel de Cervantes, 9, pp. 40-51, 1922.
- Vallejo, J. "Sobre un aspecto estilístico de D. Juan Manuel. Notas para la historia de la sintaxis española", en *Homenaje ofrecido a Menéndez Pidal. Miscelánea de estudios lingüísticos, literarios e históricos*, vol. II. Madrid: Hernando, pp. 63-85, 1925.
- Veiga, A. et al. *El modo verbal en cláusulas condicionales, causales, concesivas, finales y adverbiales de lugar, tiempo y modo*. Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca, 2006.

資料体

CREA (Banco de datos de la Real Academia Española): *Corpus de referencia del español actual*. <http://www.rae.es> [19 de enero de 2019].

Verification of our hypothesis on the modal selection in the Spanish *aunque* clause

Jun-nosuke MIYOSHI

Abstract

Our hypothesis on the modal selection in the Spanish *aunque* clause is: (1) when the event expressed in that clause is a supposition, the speaker will select there a subjunctive verb (unknown type); (2) when the event expressed in that clause is true and the speaker admits a certain contradiction between the same event and that of main clause, the speaker will select a subjunctive verb (unexpected type); and (3) when the event expressed in that clause is true and the speaker does not admit any contradiction between the same event and that of main clause, the speaker will select an indicative verb. This time we have verified our hypothesis by a questionnaire, and now we conclude that *aunque* clause expresses a normal concessive meaning in (1) and (2) cases, and a pseudo-concessive meaning in (3) case.

Keywords: modal selection; subjunctive mood; pragmatic meanings; (positive-)negative addition; (pseudo-)concessive clause.